

「在日ブラジル人子弟のためのポルトガル語教材の作成と配布」事業

在日ブラジル人児童のための学校・母語保持教室などで使用する日本語とポルトガル語のバイリンガル副教材を作成、無償配布する

在日ブラジル人の子どもは家庭ではポルトガル語を話し、学校では日本語を学んでいるが、2つの言語を結ぶ教材が不足しているため、コミュニケーションにおいてさまざまな問題が生じている。彼らが日本社会に適応するためにも、また、ブラジルの文化やアイデンティティを失わないためにも、「ことばの財産」を増やしてバイリンガルになることが求められている。

7つの童話を集めた絵本にはバイリンガルならではの工夫も

1990年の入国管理法の改正を機に、来日する日系ブラジル人とその家族が急増し、群馬県の太田市、静岡県浜松市、愛知県豊田市の工業都市などに集住がみられるようになった。しかし、ブラジル人の場合、華僑のような在日先住の受け入れ団体がいないために、言語や文化適応の面で

問題が顕在化している。そのひとつに、現在外国人集住都市を中心に約21,000人いるといわれる学齢期のブラジル人児童の教育の問題がある。

「日系といっても三世、四世になるとポルトガル語で育った子どもなので、日本語の学校の授業についていけずにドロップアウトしてしまうケースも多く、また逆に、日本語が達者になった子どもたちと親世代がコミュニケーションを取りにくくなる事例もあります。将来ブラジルに帰る可能性のある彼らにとって両言語ができることは大きな財産になります。そのためにブラジル人集住都市では在日ブラジル人の児童向けに母語保持教室が開かれています。が、いずれもきちんとした教材がないのが実態です」と話すのは、NPO法人地球ことば村の理事で、ばずる事務局を務める小幡由紀子さん。

今回のプロジェクトは、言語や文化の多様性を喚起する活動を行うNPO法人「地球ことば村」と、太田市の母



ブラジル人学校や母語保持教室で絵本の読み聞かせ活動を開始

語保持教室を支援している東京女子大学グループ「ばずる」が協働して、AJOSC助成事業として実施。在日ブラジル人児童の母語教育副教材として、日本語・ポルトガル語対訳絵本『日本の童話』3,000部を半年かけて完成させた。小学校4年から中学1年くらいまでの児童を対象に、著作権がクリアになっている作品の中から『おむすびコロリン』や『ごんぎつね』、芥川龍之介『蜘蛛の糸』、宮沢賢治『注文の多い料理店』など7つの物語を選び、それぞれのイメージに合った美しい挿絵入りで、日本語とポルトガル語で掲載している。プロジェクトの発案者であり、編集に携わった同NPO法人の小林昭美理事は、バイリンガルの本ならではの工夫について次のように語る。

「日本語の文を外国人が辞書を引く場合、どこで切ったらよいかかわからないということもあり、分かち書きを採用しています。英語のように単語で分けるのではなく、助詞までを含めての分かち書きで、実は国語の教科書でも、平仮名ばかりの小学校3年生くらいまではわかりやすいように分かち書きをしており、これを習いました。また、初回に出てくる漢字には仮名をふり、文章には番号を付けてポルトガル語の対訳と照らし合わせて読めるようにしています。本作りをしながら気づいたことも多く、私たちも勉強になりました」

全国の母語保持教室に配布し読み聞かせの活動に活用

この絵本は全国のブラジル人学校や母語保持教室に無料配布されるほか、「ばずる」のメンバーが読み聞かせなどの活動を行う予定で、これまでふさわしい教材が不足していた学習の場での活用が期待される。さらにはブ

担当者より



ことばの財産を増やすことに役立てばうれしいです
NPO法人地球ことば村
ばずる事務局
理事
小幡由紀子さん(左)
小林昭美さん(右)

資金繰りはいつも頭の痛い問題ですが、いろいろな方の協力を得ながら楽しく活動できました。この絵本が在日ブラジル人の子どもたちのことばの財産を増やすために役立てば本当にうれしいことです。大きな包容力を持って支援をしてくださったことに、心より感謝申し上げます。

ラジル大使館や、南米日系人を中心に外国人が多数居住する自治体が組織する「外国人集住都市会議」などを通して、反応を探りながら配布先を広げていく考えだ。

在日外国人に関するさまざまな取り組みは、2006年に総務省が取りまとめた「多文化共生の推進に関する研究会報告書」が出発点となり、国ではなく主として地方自治体はその役割を担ってきたが、それ故の課題も多い。

「東日本大震災の際に東北地方の在日外国人に情報などがどのように伝えられたかを調査したところ、各県の行政や自治体国際化協会の多言語による電話相談や、地域のFM局による多言語放送などという対応は地域に限られたもので、県を超えて全体をコーディネートする場がないことがわかりました。これでは効率も悪いし、情報の地域間格差も出てきます。これからは全体を包括的に見ていくような公共の場を設けて、私たちのようなボランティアを上手に使うことで活動を広げていくことが必要になってくると思います」と小幡さん。「その意味では、今回の事業は全国に向けた試みとして発信できたのではないのでしょうか。この絵本をぜひ英語でも作ってほしいという声もいただいています」と小林さん。

全国展開を見据えたこのプロジェクトは、日本とブラジルの言語と文化の架け橋となるだけでなく、今後在日外国人に関する取り組みを探っていくうえでのひとつのヒントとなるに違いない。



バイリンガル絵本では、左ページに分かち書きで日本語、右ページにポルトガル語の対訳を掲載している

